

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

今回の現地視察は、何日にも渡って、普通の訪問ではお話を伺うことができないところまで訪ね回っていくことができたという点で、大変意義深いものであったと感じている。まず現地に赴く前の事前学習では、世界農業遺産（GIAHS）について学ぶ上で、GIAHSに関連のあるどの分野について特に興味関心を持っているのかを共有し、班に分かれた。私はその土地に根付く歴史や文化について考えるグループになった。具体的には、能登半島には各地域ごとにも、そして各季節ごとにも数多くのお祭りがあることを共有し、また自分も能登半島の文化がどのようにして醸成されてきたのかとても興味があったので、固有の伝統文化やその文化ができるまでの過程に特に注目しながら学習を進めていきたいと思った。

まず実際に能登半島を視察してわかったことは、やはり能登半島には数多くのお祭りがあって、それと同じだけ固有の伝統産業や伝統農業が存在しているということだ。学びを深め、たくさんのお話を伺っていく中で、これらの産業とお祭りなどの礼祭は互いに密接に結びついていて、さらにそこに半島固有の自然環境が大きな影響を与えることで、大きな文化的サイクルが成立しているのだと感じた。つまり、能登半島の文化を成り立たせようと思ったら、里山里海という自然環境をとっても、農業や林業、そしてその他その土地に住む人間の営みをとっても、どれか一つでも欠けてしまうと成り立たない。能登半島の文化は、それぞれの要素が複合的に組み合わさって成り立っている、人間と自然のコラボレーションの奇跡の産物であったのだ。

さらに学びを深めていく中で、能登半島のお祭り文化を守りたいと思ったら、能登半島のこれまでを支えてきたその社会システムを包括的に保護していかないといけないという考えに至った。お祭りを後世に残そうと思っても、ただそのお祭りだけを、形式的に残しても、それは問題解決の本質をついていないとは思えない。何故なら能登半島のお祭りは、その儀礼というよりもその行為に含まれた信念や祈祷の意味合いが大きいのだと感じたからだ。例えば今回お話を伺った向田の火祭りは、巨大な松明が倒れた方向により豊作・豊漁の神事をするという内容だ。この「倒れる方向で占う」という行為にこそ祭りの意味合いのウェイトが置かれており、そのためにイネや小麦を育て、男たちや子供たちが協力して稲藁を束ね、結果として農業が促進されて里山が形成されたり、漁業が活発になって里海が守られる。能登の自然景観は人の手によって生み出されたものであるが、里山里海は自然環境は決して人為的なものではないということだと思った。その循環はそれぞれの要素が非常に大きな役割を担っており、お祭りだけを残しても、そこに携わる住民がいけないといけないし、その住民はその土地に根付いて生活を営む人でないと、お祭りとしての

機能は果たしえない。また、土地での人間の活動は自然環境の整備へと還元される。能登で培われている文化と社会様式は、とても構造的で、奥が深いと思った。

この点に留意しつつ、能登の文化と伝統、ひいては自然と景観を守っていくにはどうすべきか。もちろん人間と自然の共生というポイントも抑えつつ、しかし人間社会の維持が里山里海の保持の最低条件であるので、やはり人口の確保が喫緊の課題であると考えられる。この点も大変複雑な課題であり、有効な手段を模索しているところであるが、外部から住民を呼び寄せて定住してもらうよりも、地元の住民が強い結束力をもって、既存の社会を維持してもらう方が一番良いと考える。現状能登半島が直面している課題のほとんどが、人口不足によるものであり、裏返すと多くの問題は人口がいればなんとかなるのではないかも知れない。

他方で世界に目を向けると、固有の文化や帰属意識を持った社会集団がある国や地域は数多くあり、彼らもまた同様の困難に直面し、またそれぞれの文化でも固有の危機を抱えていることがわかる。イタリアではそのようなことも念頭において過ごした。実際に I F A D や F A O、W F P などの国際連合の組織で問題に取り組んでいるエキスパートの意見を伺ってみると、たくさんの参考になる意見を得ることができた。I F A D では世界各地の少数民族の支援や文化の保護に取り組んでいる部署があり、そこは固有の人々、コミュニティ、その価値、発展を重視し、そして何よりも優先するというテーゼを掲げている。そのための具体的な手段を様々に列挙して頂いたが、特になるほどと思ったのが、地域のコミュニティの首長と、国連の人と、そして政府の人が一堂に会して意見交換をする場と機会を積極的に設けているということだった。これはつまり、現場に実際に起こっている課題、支援が必要な箇所をその地域のリーダーから直接に吸い上げ、国連の人が必要な物資や人材をそろえる。そして政府が財政出動をさせるというこの仕組みができています。これは情報と資源・資産の流通を円滑にする基本中の基本のステップである。もっとも普段からの雰囲気づくりが大切であり、それぞれの立場の人がコミュニケーションを十分にとれる姿勢が求められると思う。だからこそ国連の職員の方はつねづね「とにかく相手方の文化を尊重し、敬意を払うこと」を強調されていた。

国連が扱うものは、能登半島とは扱っているテーマが異なるかもしれないが、しかし幾つかの点は大きく参考となりうるのではないだろうか。いくら同じ石川県とはいえ、能登半島と金沢では大きく状況が異なるし、日本全国の中でも、様々な立場があるだろう。同様に、能登半島のように固有の環境や文化を持つ地域もあるだろう。「相手との直接対話を大事にする」姿勢は、スムーズにそして齟齬のない問題解決にとって言うまでもない。ニュースや記事、書籍や人づてに得る情報よりも、実際に現地に飛び込んで得られる情報の方が圧倒的に密度があるし、バイアスがない。そうはいっても、すべての人が直接現地に行き議論ができるわけじゃない。自分たちも、たった数日現地に行っただけで得られ

るものは限られている。だからこそもっと現地に関わっていきたいと考えている。